

# 苦沙弥先生の使った否定辞分析

稲川 順一

キーワード＝否定辞 ない ぬ 明治時代 口語 夏目漱石  
吾輩は猫である

## 第一節 「ぬ」系から「ない」系へ

要旨 「吾輩は猫である」は明治三十八年に成立した作品で、当時の知識人階級の会話が活写されているのみならず、近隣の庶民層の人々の会話も出てきており、小説の中のものであるとはいえ、その頃の会話資料として格好のものである。この作品の会話を素材にして、当時衰退しつつあった「ぬ」系の否定辞と勢力を伸ばしていた「ない」系の否定辞の消長を、その登場人物ごとに分析して、当時の否定辞使用の状態を把握する。

目次 第一節 「ぬ」系から「ない」系へ

第二節 作品に出てくる言語集団

第三節 方針と登場人物ごとの分析

第四節 当時における「ぬ」系の占める位置

江戸語から東京語への変化の一つとして、江戸時代に関西から持ち込まれた否定辞「ぬ」系が使われなくなつて、「ない」系に統一されるようになったことが挙げられる。江戸時代も庶民の間では、江戸の地がもとより「ない」系しかない地区であつたために、もっぱら「ない（訛形でネー）」系が使われていたのだが、武士階級を中心として関西から持ち込んだ「ぬ」系の表現が根強く使われてきていた。京都文化の権威をあらわす言葉の一つとして「ぬ」系表現を始めとする表現があつたのである。上流の町人は武士階級との付き合いがあり、また、その子女は武家屋敷に行儀見習いのため奉公にゆくことがあり、上流町人階級の人々は武士階級の言葉を身につけてゆくことにより、その権威を高めようとしたこともあり、「ぬ」系の否定辞は江戸時代を通して減びることはなかつたのである。

時代が明治に変わり、階級がなくなり、それまでの武士階級の権威ゆえに使われていた言葉は、あるものはその扱

り所を失い、消えてゆくのである。「ぬ」系の否定辞はその一つである。

現代の東京語では「ぬ」系の否定辞は「相変わらず」とか「残らず」とかの慣用句などに残っているものを除けば、全く廃れてしまったと言えよう。では、いつ頃から「ぬ」系の表現が用いられなくなったのだろうか。

明治時代の文学作品を見ると「ぬ」系の否定辞はまだよく使われていて、この時代に東京語で消滅したとはいえない。本稿では、消滅するまでにどのようなありさまで「ぬ」系・「ない」系が併用されていたのか、そこにどのような変化の有様がうかがわれるのか、階層によりどんな違いがあったのか、いかに現代への移行が進んでいるのかを見ることにした。

## 第二節 作品に出てくる言語集団

本稿では夏目漱石著『吾輩は猫である』（明治三八年）を対象に右記の変化を探ることにした。正確に言えば変化ではなく、その時代における言語使用分析である。

漱石は慶応三年（翌年は明治元年）、江戸牛込に生まれ、

明治時代とともに生きてきた人物である。この作品を取り扱うことにした理由は、漱石が明治時代とともに成長してきて、明治文化を体現していると考えたからである。しかも江戸時代の漢学を中心とした旧来の文化と英国留学に象徴される西洋文化とともに深く関わった人物である。

また『吾輩は猫である』には会話文が多く、漱石などの知識階級の言葉のみならず庶民の話す下町言葉をも含む当時の東京方言も見ることができるのである。

登場人物は言葉遣いに関して、次のようなグループに分けられる。

(一) 苦沙弥先生と彼を取り巻く人々

苦沙弥先生、迷亭、寒月、東風、独仙、三平、甘木医師、迷亭の伯父（牧山）、鈴木

右の人々は知識層に属し、会話もその分、江戸の武士階級の言葉の要素を残していると考えられる。また、それぞれが年齢により環境により、言葉遣いが少しずつ異なる。若い人は江戸語の要素が少なく現れる。三平は肥前の国唐津の出身で唯一方言しか喋らない人物として登場する。迷亭は登場回数も多く、また最も多弁な友人で同窓である。独仙も同窓の友人である。鈴木も同窓であり(三)に出てくる金田家との関わりを持ち、このグループでは異色であ

る。

(二) 苦沙弥先生とその家族・親族および使用人

苦沙弥先生、細君、とん子、すん子、姪の雪江、下女の御三

苦沙弥先生は家族との会話では当然ながら(一)の人々に対してとは違うくだけた話し方をする。その時の右との違いに興味を持たれる。細君は東京育ちなのであるうか、きわめて当世風の話し方をするし、雪江は登場回数は少ないものの女学生ならではの話し方である。

(三) 近所の人々

二絃琴のお師匠さん、車夫、飯焚、車屋の神さん、湯屋の客(複数)

これらの人々は庶民階層であり、江戸下町の言葉を継承している。

金田家 金田主人、金田鼻子、金田娘

いわゆる成金の家であり、言葉遣いの点では庶民とは違う言葉話すように心がけているようである。

落雲館の人々

隣接した学校の人々である。生徒においては当時の若い人の遠慮のない言葉遣い、教師については学校における教

師という職業の場面での言葉遣いがかがえる。

(四) 我が輩とそのまわりの猫

我が輩、黒、三毛君、三毛子、白

この小説は「我が輩」であるところの主人公の猫を視点として描かれているのであるが、我が輩と近所の猫との会話がでてくる。これらの猫はそれぞれの飼い主の言葉遣いを反映して喋っている。

概ね、右のような言語集団がこの作品の中に読み取れる。以下、各人の会話の実態に基づいて否定表現の使われ方を見てゆきたい。

### 第三節 方針と登場人物ごとの分析

まず、本論文の分析についての方針を示すことにする。作品「我が輩は猫である」に出てくる否定辞には「ない」系と「ぬ」系と「なんだ」系の三つがある。このうち「なんだ」系は会話文では迷亭の伯父(老人)が迷亭へ「おれも睡眠時間を四時間に縮めるには、永年修業をしたもんだ、若いうちは何うしても眠たくていかなんだが、近頃に至って始めて随処任意の庶境に入ってはなはだ嬉しい」に出て

くる一例のみであり、地の文（我が輩の心中文）では「いや段々事件が面白く発展してくるな、今日はあまり天気が良いので、来る気もなしに来たのであるが、かう云ふ好材料を得様とは全く思ひ掛けなんだ。」の一例のみの合計二例のみであるので、分析の対象からは外すことにする。打ち消しの意志「まい」も分析からは外す。

本文には地の文と会話文があるが、本論では会話文のみを取り上げることとし、地の文についてのデータは省く。会話文の方が当時の話し言葉をより反映していると考えられるからである。尤も会話文が当時の会話をそのまま反映していることはないのである。また地の文といつても全編が我が輩の語りとなつているので、他の作品の地の文とは性格を異にしている。手紙文、日記、作品の朗読などもデータからは外す。

ここでは各人が誰に対してどのような割合で「ない」と「ぬ」系とを使い分けているかを述べて行きたいと思う。表を見ながら論じて行く。表は「ない」の使用率が高いものから順に並べている。例数が少数のものもあるが、総例数について述べるときに参考になると思われるので、すべてについて挙げていく。論じるときは例数の多いものについて述べる。

(一) 苦沙弥先生の場合

誰から	誰へ	ない%	ない系	ぬ系	総数
苦沙弥	東風	100.0%	4	0	4
苦沙弥	保険外交員	100.0%	3	0	3
苦沙弥	倫理教師	100.0%	1	0	1
苦沙弥	学者某	100.0%	1	0	1
苦沙弥	武右衛門	77.8%	7	2	9
苦沙弥	伯父	66.7%	2	1	3
苦沙弥	寒月・東風	63.6%	14	8	22
苦沙弥	迷亭	60.3%	41	27	68
苦沙弥	独仙	60.0%	3	2	5
苦沙弥	鈴木	58.8%	10	7	17
苦沙弥	鼻子	66.7%	4	2	6
苦沙弥	雪江	57.1%	4	3	7
苦沙弥	寒月	54.8%	23	19	42
苦沙弥	甘木	50.0%	1	1	2
苦沙弥	三平	42.9%	3	4	7
苦沙弥	独白・独話	40.6%	13	19	32
苦沙弥	細君	35.4%	17	31	48
苦沙弥	落雲館生徒	33.3%	1	2	3
苦沙弥	細寒	33.3%	1	2	3
苦沙弥	御三	0.0%	0	3	3
苦沙弥	湯屋書生	0.0%	0	1	1
苦沙弥	合計	53.5%	153	133	286

表 1

表 1 を参照しながら述べて行く。苦沙弥先生が誰に対してどういう否定辞を使っているかの表である。

この場合、基準になるのは苦沙弥独白・独話としている彼の心中文もしくは一人言であろう。その場合は誰を意識するでもない訳であるから、最も素の状態になると思われる。これより $\infty$ が高くても低くても何らかの意識が働いているとしていいだろう。

そこでそれより「ない」系の使用率が低い対象人物を見ると、細君、落雲館生徒、細君と寒月、雪江（雪江に対してはあとで注をつける）、御三、湯屋での書生などに対し

てであり、彼にとつては氣を遣わないですむ相手ばかりである。(表に細寒と記しているのは細君と寒月に同時に話しかけているという意味である。ほかにも複数に話しかけている場合、同様に記す)

細君へ「連れて行つてやらん事もないが今日の語り物は何だ」「愚な事を言はんで、早くあとを云ふが好い。」

落雲館生徒に「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に闖入するのを、そう容易く許されると思ふか」

雪江は苦沙弥の姪である。雪江への割合はここに挙げてある57.1%よりも実際には低い。なぜならば雪江への発話「入らないと云ふから、還せと云うのさ。」「現に入らないと云ったぢやないか」などは雪江の言葉を受けての苦沙弥の発話であるから、実質的には雪江の言葉である。他に雪江に「御前の学校ぢや論理学を教へないのか」「分らん事を言ふ奴だな」

苦沙弥独白より割合の高い、しかしその低い順に述べる  
と、三平42.9%は先生宅の元書生である。三平に「まだ悪いとも何とも云やしない」「不人情ぢやないが、おれは出ないよ」

寒月54.8%は旧門下生であるので遠慮はいらぬ。寒月に「それは僕も賛成だ、そんな物欲しさうな事は言はん方

が奥床しくて好い」「構はんぢやないか、人が二百や三百通つたつて、君は余つ程妙な男だ」

鈴木58.8%は大学の同窓生である。しかし、鈴木は実業界に出ていて馬が合うという仲ではない。鈴木に「俳体詩を知らないのか、君も随分時勢に暗いな」「それは結構だ、大分長く逢はなかつたな。」

このように見てくると、苦沙弥が「ぬ」系の否定辞を使うときは、相手と心理的な距離が近いときである、と言えよう。

「ない」の割合の高い方から見て行くと、東風100%は寒月から紹介された人物であり、先生より年齢は若いけれども人脈としては新しい。東風に「朗読でも癪を起さなくつちや、いけないんですか」「詩人かも知れないが随分妙な男ですね」

武右衛門77.8%は艶書を出すのに自分の名前を貸したことで退学させられないか心配になり先生に相談に来た学生で個人的には初対面といつてもいい間であり、距離のある人物である。武右衛門に「外に誰も聞いて居やしない。」「わたしも他言はしないから」ただ怒るときは「ぬ」系が出る。「名前又は君の名だつて、何の事だか些とも分らんぢやないか。」

迷亭は友人の中でも一番付き合ひの頻繁な者であるが、

この表を読んでいくと、否定辞では親しすぎず、遠すぎず、ちょうどいい距離を置いているという心理的距離が見て取れる。迷亭に「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。」  
「君のようないたづらものに逢っちゃ敵はない」

(二) 迷亭の場合

迷亭	寒月東風	100.0%	1	0	1
迷亭	ボイ(給仕)	100.0%	1	0	1
迷亭	寒月	90.0%	36	4	40
迷亭	東風	81.8%	9	2	11
迷亭	伯父	75.0%	3	1	4
迷亭	全員	65.4%	17	9	26
迷亭	苦沙弥	64.9%	74	40	114
迷亭	鈴木	50.0%	5	5	10
迷亭	会話中独白	50.0%	1	1	2
迷亭	細君	45.5%	15	18	33
迷亭	鼻子	40.0%	2	3	5
迷亭	苦寒	7.7%	1	12	13
迷亭総計		66.4%	164	83	247

表 2

表 2 を参照しながら述べる。苦沙弥先生の「ない」系使用率の平均が 55.5% であるのに対して、迷亭の平均は 66.4% であり、相対的に「ない」系を使う頻度が高い。その意味では迷亭の方が近代語的である、と言える。職業も

美学者であり、背景に西洋的なものが見え、先生に比べ江戸的な要素が少ないことも影響しているであろう。迷亭の場合、基準になるのは苦沙弥先生と話している時 64.9% と考える。

それと比して寒月 90% と東風 81.8% に対しては「ない」系の割合が高い。

寒月が若い人なのでそのような喋り方をするのであろう。寒月に「油断のならない世の中だ。」「美学者と希臘とは到底離れられないやね。」

東風も若い人なので迷亭は「ない」系を多く使うと思われる。東風に「いや君のだから読まないのぢやない。」「君が直覚的にさう思はれなければ、僕は曲覚的にさう思ふ迄さ」

全員と書いているのは苦沙弥先生を中心にその場面の全員に話しかけていることを示している。

対苦沙弥先生より低いのは鈴木 50%、苦沙弥細君 45.5%、鼻子 40% に対する時である。

鈴木は大学の同窓生であるので、遠慮はいらないため「ぬ」系が多いのであろう。

鈴木に「僕の有望な画才が頓挫して一向振はなくなつたのも全くあの時からだ。」「どんな僥倖に廻り合はんとも限らんからね」

細君	雪江	100.0%	7	0	7
細君	子供たち	100.0%	1	0	1
細君	迷亭	92.3%	12	1	13
細君	苦沙弥	88.0%	22	3	25
細君	三平	60.0%	3	2	5
細君	寒月	0.0%	0	1	1
細君総計		97.8%	45	1	46

表 3

(三) 細君の場合

い)

苦沙弥の細君に対してはある意味苦沙弥に対してよりも気を遣わなくてもいいのであろう。細君に「さあ遠慮はいらんから、存分御笑ひなさい」「なあに書物なんか取って来る丈取って来て構はんですよ。」

これを見ると、苦沙弥の場合と同じく、心を許している相手に対しては「ぬ」系を使い、気を遣う相手に対しては「ない」系を使う傾向があると言えよう。その点では苦沙弥先生と同じであるが、より「ない」系が多用される傾向がある。(表の最下段に苦沙弥・寒月に対して「ぬ」と非常に低い率を示しているところがあるが、これは二人に対して演説調で話をしているところであり、いわゆる普通の会話ではな

表3を参照しながら述べる。「ない」系が97.8%とほとんどを占めている。完全に近代語化していると言つてよい。100%でないのは、苦沙弥先生に対して唯一「ぬ」系が三例あるからである。それもすべて敬語がらみである。細君の古風な言葉遣いが垣間見えるところである。

「起きると仰つても御起きなさらんぢやありませんか」「夫でもあなたが御飯を召し上らんで麵麩を御食べになつたり、ジャムを御舐めになるものですから」「出しておけて、あんな立派な御召はごせんせんは。」「この「ごせんせん(ごさんす)」はもともと上方語出自のものであり、「ません」同様に本論文では「ぬ」系に換算しないほうがいいであらう。

「ない」系では「あなた位冷酷な人はありはしない」「女房などは、どんな汚ない風をして居ても、自分さい宜けりや、構はないんでしよう」

他の人にも数字上は「ぬ」系があるが、これはすべて「知らん顔」「相変はらず」など慣用句である。

迷亭に「ほかの道楽はないですが、無暗に読みもしない本許り買ひましてね。」「慥かなところはよく考へて見ないと分りませんわ」

三平に対して「ぬ」系が出てくるのは「相変わらず」という言葉がでてくるためであり、それ以外は「ない」系で

ある。

(四) 雪江の場合

雪江	子供たち	100.0%	13	0	13
雪江	苦沙弥	100.0%	12	0	12
雪江	細君	93.3%	14	1	15
雪江総計		97.5%	39	1	40

表 4

表 4 を参照しながら述べる。雪江は苦沙弥の姪で、若い娘ということもあり、100%すべて「ない」系だけを使っている、やはり近代語化が進んでいる。子供達にも細君にも苦沙弥にも「ない」系だけしか使っていない。

苦沙弥に「日本の警察がいけないって、吉原を散歩しちゃ猶いけないいわ。」

細君に「なぜ、あんななんでせう、ここへいらっしやる方だって、叔父さんのようなのは一人も居ないわね」

子供達に「今の世に警察の仮声なんか使ったって誰も聞きゃしないわね」

(五) 寒月の場合

寒月	東風	100.0%	21	0	21
寒月	三平	100.0%	2	0	2
寒月	苦沙弥	75.0%	24	8	32
寒月	全員	74.2%	23	8	31
寒月	迷亭	68.8%	11	5	16
寒月総計		79.4%	81	21	102

表 5

表 5 を参照しながら述べる。寒月も79.4%と「ない」系を使う割合が非常に高い。苦沙弥に対して「ぬ」系を使っているが、これは苦沙弥は恩師であること、また年長者に合わせて使ったふしがある。迷亭に対しても使っているが、「いらぬ苦勞」「仏作って魂入れず」などのような慣用語があるためである。

苦沙弥に「実は去年の暮から大に活動して居るものですか、出様々々と思つても、つい此方角へ足が向かないので」「引つ張る訳ぢやないんですが、どうも、まだ買へないんですから仕方がありません」「だつて興行さへしななければ構はんぢやありませんか。」「急いで来んでもいいのですけれども、此おみやげを早く献上しないと心配ですから」



(六) 迷亭伯父(牧山)の場合

迷亭伯父	迷亭	36.4%	4	7	11
迷亭伯父	苦沙弥	20.0%	1	4	5
迷亭伯父計		31.3%	5	11	16

表 6

表 6 を参照しながら述べる。この老人は未だにちよん髻を結っている昔気質の静岡の人として登場してくる。やはり「ない」系は 31.3% と非常に低い。漢学者であるということもあり旧来の言葉遣いが残っているためと考えられる。

苦沙弥に「私もとはこちらに屋敷も在って、永らく御膝元でくらしただけですが、瓦解の折にあちらへ参ってから頼と出てこんのでな。」「今来て見るとまるで方角も分らんくらいで——迷亭にでも伴われてあるいてもらはんと、とても用達も出来ません。」

迷亭に「ことに宮様の御顔を拝むなどと云ふ事は明治の御代でなくては出来ぬ事だ。」

(七) 独仙の場合

独仙	東風	100.0%	10	0	10
独仙	独白	100.0%	1	0	1
独仙	迷亭	76.9%	10	3	13
独仙	全員	75.0%	12	4	16
独仙	寒月	50.0%	3	3	6
独仙	苦沙弥	33.3%	12	24	36
独仙	人たち(講演)	33.3%	1	2	3
独仙	三平	0.0%	0	1	1
独仙総計		57.0%	49	37	86

表 7

表 7 を参照しながら述べる。独仙の平均は 57% で苦沙弥 53.5% に近く、迷亭の 94% や東風の 76.9% に比べるとかなり低いといえる。苦沙弥、迷亭、独仙は歳も近いかわりに、それぞれに、それぞれの職業や考え、生き方によって、ずいぶん違いがあると、言わざるを得ない。

東風に対しては「100%」「ない」系である。「ニーチェの時代はさうは行かないよ。」「だからおれは孔子だよと威張っても圧が利かない。」

同窓の迷亭に対しても 76.9% と「ない」系が多い。「僕は負けても構はないが、君には勝たしたくない」「うむ、そりゃ夫でいいが、ここへ駄目を一つ入れなくちゃいけない」

苦沙弥に対しては作品中でも実に自在にこだわりなく話

しているさまがうかがわれる。氣を許しているさまが如実に見え、93.3%が「ぬ」系である。独仙は苦沙弥に話すときの「ぬ」系の多用で全体の「ない」系の%を下げている。迷亭が独仙のことをその述べる考えより氣の小さな男であると述べているが、實際結構氣を使う人なのかもしれない。苦沙弥に「あまり合はない背広を無理にきると綻びる。」「只難有い事に人を羨む氣も起らんから、夫れ丈いいね」「だつて談判しても、喧嘩をしてもその妨害はとれんのぢやないか。」

(八) 三平の場合

三平	細君	9.1%	1	10	11
三平	苦沙弥	0.0%	0	11	11
三平	とん子	0.0%	0	2	2
三平	寒月	0.0%	0	2	2
三平	東風	0.0%	0	1	1
三平	独仙	0.0%	0	1	1
三平	独白	0.0%	0	1	1
三平	總計	3.4%	1	28	29

表 8

表 8 を参照しながら述べる。三平は「ない」系は34%しか使わない。彼は肥前の唐津の言葉話すのが専らであり、細君に対しての一例(「また借金をしなければならん

ですか。)」以外は「ぬ」系しか使わない。苦沙弥に「かうやって、うちに許り居なさるから、いかにんたい」

寒月に「あなたが寒月さんですか。博士にや、とうとうならんですか。」

このように「ぬ」系しか使わないのは九州方言が「ない」系の否定辞とは共通語が一般化するまで出会わなかつたからである。

(九) 東風の場合

東風	三平	100.0%	1	0	1
東風	独仙	100.0%	1	0	1
東風	寒月	84.6%	11	2	13
東風	迷亭	80.0%	4	1	5
東風	苦沙弥	66.7%	6	3	9
東風	總計	79.3%	23	6	29

表 9

表 9 を参照しながら述べて行く。東風の割合は「ない」系79.3%であり登場人物の中でもその友人寒月79.4%とともに苦沙弥先生の交友関係の中では最も高い割合の使用である。苦沙弥先生の交友関係の中では若い人に位置し、話し方も若い人の話し方である。苦沙弥との関わりは寒月か

ら紹介されたという間柄である。

寒月へは80%が「ない」系である。基本は「ない」系であり、「ぬ」系は「気にかけて」など慣用的であったり、改まった話し方の場合である。「ヴァイオリンは弾かないのか」「何だか君の話は物足りないような気がする」「音楽会杯へ行つて出来る丈熱心に聞いて居るが、どうも夫程に興味に乗らない」

迷亭へは80%とくだけた話し方である。「そりゃさうですけども私はどうも直覚的にさう思われななんです」「いや其位感覚が鋭敏でなければ真の芸術家にはなれないですよ。」

苦沙弥へは95%であり迷亭へ対してよりも遠慮がうかがわれる。遠慮が「ぬ」系を増やしているということは、苦沙弥などと違って新しい言葉遣いの人と言えよう。「さあ、其趣向といふのが、其時は私にも分らなかつたんですが、何づれあの方の事ですから、何か面白い種があるのだらうと思ひまして……」「いえ、癪坏は起して頂かんでもよろしいので、ここに賛助員の名簿が」「先生御分りにならないのは御尤で、十年前の詩界と今日の詩界とは見違へるほど発達しておりますから。」

(十) 鈴木の場合

鈴木	独白	100.0%	1	0	1
鈴木	金田	57.1%	4	3	7
鈴木	苦沙弥	40.0%	16	24	40
鈴木	迷亭	36.4%	4	7	11
鈴木	鼻子	0.0%	0	2	2
鈴木総計		41.0%	25	36	61

表 10

表10を参照しながら述べる。鈴木は $\frac{1}{61}$ と登場人物の中でも非常に「ない」系の割合が低い点で印象的である。迷亭伯父(牧山)の $\frac{31}{61}$ に近く同窓生の苦沙弥や迷亭と比べてその割合が非常に低い。苦沙弥や迷亭との会話が多く、いつもは会社人間としての会話が多くのに、二人に対しては同窓生であり警戒心が薄いために「ぬ」系が多く出ていると考えられる。迷亭に対しては「相変わらず」などの慣用句が「ぬ」系を増やしている。やはり苦沙弥などと同じように、寛いだときには「ぬ」系を多用するものと思われる。苦沙弥に $\frac{40}{61}$ 「君にや分るかも知れんが、僕にや判然と聞かん事は分らん」「でも着いぜ、用心せんといかんよ。」「うん、気を引くと云ふと語弊があるかも知れん。」

金田	鈴木	14.3%	2	12	14
金田	鼻子	0.0%	0	2	2
金田総計		12.5%	2	14	16

表 11 の 1

鼻子	苦沙弥	100.0%	1	0	1
鼻子	鈴木	91.7%	11	1	12
鼻子総計		92.3%	12	1	13

表 11 の 2

金田娘	長吉	100.0%	6	0	6
金田娘	小間使い	100.0%	3	0	3
娘総計		100.0%	9	0	9

表 11 の 3

表 11 を参照しながら述べる。金田主人の割合は 15.6% とほとんど「ない」系を使わない人物として描かれている。話し相手も部下に当たたる鈴木と妻の鼻子であつて、氣を遣う必要のない相手である。実業界では実力もある人物として描かれている。「ない」系を使う例は「先達て妻が行つた時は今の始末で碌々聞く事も出来なかつた訳だから、君から今一応本人の性行字才等をよく聞いて貰ひたい」「どうでもいいんだが、君でないとい出来ない事なんだ」と鈴木に苦沙弥から寒月のことを聞き出してほしいという依頼の内容であるため、丁寧に話しているようである。これ以外に鈴木に対して「ぬ」系で話をしている。「何か怒つて居るかも知れんが、怒るのは向が悪るいからで、先方が大人しくしてさえ居れば一身上の便宜も充分計つてやるし、氣

に障はるような事もやめてやる。」

妻に話すときは二例とも「ぬ」系である。「御前がどの馬の骨だか分らんもの言ふ事を真に受けるのも悪い」

金田主人にとつては「ない」系で話すときは相手に對して氣を遣つて居る場合であると言えよう。これは彼が江戸の富裕町人層の話し方の流れを受け継いでいるためであると考えられる。

鼻子は「知らん顔の半兵衛」という成句を除いては 100% 「ない」系の否定辞を使っている

鈴木へ「それでも義理は義理でさあ、人のうちへ物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりですから、後で車夫にビールを一ダース持たせてやつたんです。」「ほんとうにどこ迄も氣の知れない人ですよ」江戸語の武家階層や富裕町人層の否定辞「ぬ」の流れは全く受け継いでいない。

金田娘は鼻子の娘であり、同じくすべて「ない」系の否定辞を使っている。小間使いに「寒月でも、水月でも知らないんだよ」長吉に「黙つてちゃ分らないぢやないか」

鼻子は現代風に話そうとしている様かかわれるが、その素地に江戸下町の言葉を受け継いでいるところがある。一方金田の娘は新しい東京語の言葉遣いと見なされる。

(十二) 湯屋にて

湯屋にて	湯屋客会話	100.0%	15	0	15
湯屋にて	湯屋主人から客	0.0%	0	2	2

表 12

表 12を参照しながら述べる。湯屋での客同士の話は、すべて「ない」系で話がされている。実際には「ねえ」となる。

「金さん、どうも、ここが痛んでいけねえが何だろう」「人間もやきが廻つちや若い者には叶はないよ。」「どう云うもんか人に好かれねえーどう云ふものだからーどうも人が信用しねえ。」

登場してくる人物は江戸下町の言葉の流れを受け継いでいるようである。

七十歳くらいの湯屋の主人の発話は二例であるが、湯屋客とは違って「ぬ」系だけである。一例は「相変わらず」と慣用句であるが、話方としては丁寧で江戸富裕町人層の言葉の流れである。

湯屋客に「あなた方は、御若いから、あまりお感じにならないかの」「へい、どなた様も、毎日相変らず難有う存じます。」

(十三) 落雲館の人々

落運館	生徒同士	100.0%	10	0	10
落運館	倫理教師	0.0%	0	10	10
落運館	教師から生徒	25.0%	1	3	4

表 13

表 13を参照しながら述べる。落雲館は苦沙弥先生の自宅の傍にある学校である。

生徒同士の会話はすべて「ない」系である。

生徒「降参しねえか」「しねえしねえ」「駄目だ駄目だ」「出てこねえ」「落ちねえかな」「落ちねえはずはねえ」

若い人の東京語というよりも下町の言葉と言えようか。雪江などの東京語とは一線を画していると言えよう。

一方、倫理の教師の授業での物言いはすべて「ぬ」系である。「知らず知らず」「取りも直さず」などの慣用句もある。生徒に授業中「またどんな下等な者でも此公德を重んぜ

ぬ者はない。「どこへ行っても、此公德の行はれておらん国はない。」授業以外では「ぬ」系と「ない」系が混在する。「もしボールが飛んだら表から廻って、御断りをして取らなければいかん。」

(十四) 近所の人々

近所同士	車屋さん	100.0%	6	0	6
近所同士	から車夫	100.0%	1	0	1
近所同士	黒のうしろ	100.0%	1	0	1
近所同士	神さん独白	100.0%	1	0	1
近所同士	車屋さん	100.0%	1	0	1
近所同士	車屋さん	100.0%	1	0	1
近所同士	車屋さん	100.0%	1	0	1
近所同士	飯焚から	100.0%	1	0	1
近所同士	車夫	100.0%	1	0	1
近所同士	総計	100.0%	10	0	10

表 14

表 14 を参照しながら述べる。近所の人々はすべて「ない」系を使っている。もっともほとんどは車屋神さんから車夫への会話である、

「あの教師と来たら、本より外に何にも知らない変人なんだからねえ。」「旦那の事を少しでも知ってりや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の小供の歳さへ知らないんだもの」

車夫から飯焚へ「知らねえ事があるもんか、この界限

で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪だあな」

猫の黒のうちの神さん独白「ほんとに憎らしい猫だっちゃやありやあしない。」

男性から女性へは訛った「ねえ」を使うが、女性から男性への場合、訛らない「ない」を使うということがうかがえる。

近所には他に二弦琴の師匠がいるが、その割合は 90% で「ない」系が多い。下女に「どうも困るね、御飯をたべないと、身体が疲れるばかりだからね」「風邪を引くといつても余り出あるきもしない様だったに……」「旧幕時代に無い者に碌な者はないから御前も気をつけないといかんよ」「あんな声を出して何の呪ひになるか知らん。」物言いは丁寧であり、近所の人々とは一線を画している。

(十五) 猫の会話

猫の会話	三毛子から吾輩	100.0%	2	0	2
猫の会話	三毛君から吾輩	100.0%	1	0	1
猫の会話	黒から我輩	81.8%	9	2	11
猫の会話	吾輩から三毛子	50.0%	1	1	2
猫の会話	吾輩独白	50.0%	1	1	2
猫の会話	吾輩から黒	33.3%	1	2	3
猫の会話	白君から我が輩	0.0%	0	3	3
猫の会話	吾輩から迷亭(夢)	0.0%	0	1	1
猫総計		60.0%	15	10	25

表 15

表 15 を参照しながら述べる。第二節でも述べたように、それぞれの猫は飼い主を反映した言葉を使っている。猫を借りてその飼い主を表現していると言ってもいいであろう。ただ例数が少ないので最も数の多い車屋の「黒」(我が輩から大王とも呼ばれる近辺で知らぬ者なき乱暴猫である)についてだけ述べよう。

「相変わらず」という慣用句を除けばすべて「ない」の訛った「ねえ」である。他の語彙も含めて江戸下町の言葉の流れである。

「何におれなんぞ、どこの国へ行ったって食ひ物に不自由はしねえ積りだ。」「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたちってえ奴は手に合はねえ。」「いくら稼いで

鼠をとったって——一てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。」

第四節 当時における「ぬ」系の占める位置

最後に作品の中で発話した人々のすべての発話の中で「ない」系が何%を占めるかを表した表 16 と図 1 を載せる。

	発話者	ない%
1	金田娘	100.0%
2	湯屋客会話	100.0%
3	生徒同士	100.0%
4	近所同士	100.0%
5	細君	97.8%
6	雪江	97.5%
7	金田鼻子	92.3%
8	寒月	79.4%
9	東風	79.3%
10	迷亭	66.4%
11	猫の会話	60.0%
12	独仙	57.0%
13	苦沙弥	53.5%
14	鈴木	41.0%
15	迷亭伯父	31.3%
16	金田主人	12.5%
17	三平	3.4%
18	倫理教師授業	0.0%

表 16

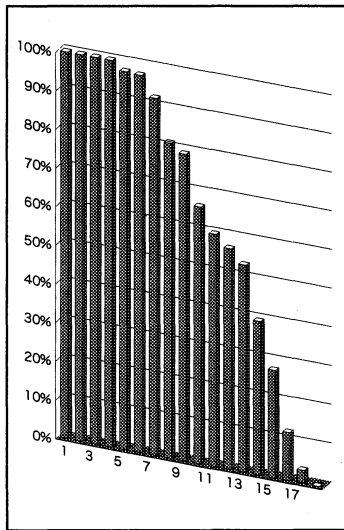


図 1

この図および前節での検討を踏まえて次のような種類の人々がいると言えるであろう。

(一) 改まったときは「ない」系を使うが、気を許す相手には「ぬ」系で話す傾向がある。「ない」系が新しい規範であることを知っているが、「ぬ」系にも旧来からの規範を認めていて、「ぬ」系で話す方が自然である。

苦沙弥先生、鈴木、迷亭伯父、迷亭

(二) 改まったときは「ない」系を使うが、「ぬ」系にも一つの規範を認めて、自分の権威付けにあるいは旧来からの規範を示すために使う。

金田主人、落雲館倫理教師

(三) 自らは普段「ない」系を使い、その方が自然であるけれども、年上の「ぬ」系を使う人には相手に合わせ「ぬ」系を使う。

寒月、東風

(四) 「ぬ」系に旧来からの規範を認めているが、それは完全に古いものとして自らは「ない」系しか使わない。

細君、雪江(雪江の方が「ぬ」系とは更に無縁である)

(五) 「ぬ」系の体系とは無縁で「ない」系しか使わない。

金田娘、湯屋客、落雲館生徒、近所の者

右のような人々がいることが「ぬ」系、「ない」系の使

用を見ていって分かった。それぞれの人々が会話をしている場面や位相が違うということを考えても、やはり昔からの言葉の体系はそうたやすく崩れ去るものではないようである。苦沙弥先生や独仙に代表されるその当時のある年齢以上の知識階級の人のみならず、金田主人のような旧来の表現で言えば富裕町人層の人々も「ぬ」系の言葉から抜け出すことはまだまだ時間を要するようである。「ぬ」系の方が気楽に話ができる人々である。

一方、雪江や細君のような女性、寒月、東風などの若い人々は「ない」系を使って実に軽やかに話すありさまが描かれている。彼等は「ない」系で話す方が気が楽なのである。「ぬ」系の言葉が示す旧くからの権威はこれらの人々とは無縁であり、彼らの新しい東京語にやがて古い江戸武士階級の言い方は取って代わられるのであるうさまが読み取れる。

また、江戸下町の人々の言葉は右の若い人々の言葉とは違う流れを持ち、しぶとく生き残っていくであろうことも読み取れる。これは下町言葉を支えてきた人々の階層は相変わらず生き残っているためと考えられる。

注この論文を書く為の作業にあたり「青空文庫」を使った。さらに『漱石全集巻一』(1993岩波書店)を使って検証した。